

(望岳山荘にて「川島浪速」を読んで(市民タイムス-1990.09.28)

望岳山荘

にて

『市民タイムス』を
読むようになって、郷
土のことが様々な角度
から照射され、持統的
に関心をもつべき領域
が広がったような気が
する。

本紙に連載された松
本平人物誌「川島浪速」
(倉科平・作、富浦
真之助・画)もこの
点で大変興味深いもの
だった。

高齢の松本市民な
ら、俗に男装の麗人
とか、東洋のマタ・ハ
リと言われて一世を
風靡した川島芳子につ
いてはよく知っている
であろうし、私の母も
その一人であるよう
に、馬に乗って松本高

女(現鎌ヶ崎高校)に
通学した芳子像を記憶
している方も少なくは
なからう。しかし、そ
の養父・浪速のことと
なると、あまり知られ
ていないか、一般には
せいぜい松本出身の大
陸浪人という程度の認
識なのではなからう
か。

私がかね
がね、自分
が中国研究
を専門とし

ていること以外に、次
の二点からして、川島
浪速には強い関心を抱
いていた。その一つは、
いうまでもなく、彼が
松本藩士の子として生
まれた郷土の出身者で
あること、二つは、私
の母校でもあり現勤務
校でもある東京外語大
の前身、東京外国語学

「川島浪速」を読んで

校支那語科(明治十八
年に当時の不当な文教
政策のためにいったん
廃校となった旧外語)
に在籍した異才だった
ことである。

時代が変わり、中国
側の歴史評価の厳しさ
もあって、川島浪速は
否定されるべき人物とし
て一部で語られてい

た。だが、本紙にも描
かれていたように、彼
が生涯のパートナー
親王の心をすっかりと
らえ、台湾総督時代の
乃木希典にあればと信
頼されたばかりか、友
人では外語露語科同窓
生の長谷川辰之助(二
葉亭四迷のこと)をは
じめ、戦前の有名な中

島浪速の面目を躍如た
らしめ、ついに紫禁城
攻撃をドイツ軍に思い
とどまらせた最大の武
器であったことは、殆
んど気づかわれていな
い。

着目せざる
を得ない。

就中、

彼は中国語
に実には堪能で、俗人の
及ぶところではなかつ
たと言ふ。その中国語
の能力が、一九〇〇年
(明治三十三年)の義
和団事件に発端する八
カ国連合軍の北京進攻
(北清事変)に際して、
当時、同じ松本出身の
福島安正・日本軍司令
官(少将)の軍使・川

今、北京はアジア競
技大会。多くの外国人
が世界屈指の名所・紫
禁城(現故宮博物院)
を訪れるにちがいな
い。この人類の遺産が
灰燼に帰することなく
現存している歴史の裏
側に、松本出身の「国
士 川島浪速」(木沢
の正麟寺の墓標)が存
在していたことを、せ
めて私たち松本の者は
しかと記憶にとどめる
べきではなからうか。

(中嶋 嶺雄・東京外
語大教授)